



途上国も日本も元気にする JICA

独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター所長 勝田幸秀

JICA は日本を元気にします、と言ったら、JICA は途上国の支援を行うのだから違うのではないか、と思われるかもしれませんが、でも、実際に今の JICA は途上国も日本も九州も元気にしようとしています。

日本の援助はかつて、貧しい途上国の人々を助けるためなのか、それとも、国民の税金を使うのだから日本にとっての利益、つまり国益を追求しなければならぬのか、といった議論が盛んに行われた時期がありました。そしてそ

の主張は、人により、立場により、時期により変わり、結局のところ日本の援助には理念がない、などと言われることにもなりました。

1990 年代には世界のトップドナーの地位を誇っていた日本は、現在では予算額がピーク時の半以下になり、アメリカ、ドイツ、イギリス、フランスに続く、第 5 位に甘んじています。厳しい財政事情の中から貴重な税金を JICA に割り振っていただいている以上、私たち JICA の人間はそれを最大限有効に活用するのが責務です。では、その最大限有効の意味するところは、途上国の人々にとっても役に立ち、感謝されるものであり、かつ、日本にとっても、短期・長期の視点から有益なものでなければならず、二者択一ではなくて、途上国にとっても日本にとっても有益なウィンウィン関係を築くこととなります。

たとえば、近年予算が急激に伸び、注目度も高まっている JICA の民間連携事業では、途上国にとって役に立つのに知られていない優れた技術やノウハウが国内に数多くあり、これらを利用して開発途上国の問題解決を図れば、途上国にとっても、技術を提供する日本企業にとっても有益な援助事業が実施できるという考えによっています。

近年、途上国の発展は援助だけでなく、民間企業や民間資金による経済の活性化や雇用の増大によってもたらされる割合が高くなってきています。そこで



JICA は、これまでの途上国支援の経験や現地でのネットワークを活かして、途上国に進出しようとする民間企業を支援し、前述の埋もれていた日本の技術を活用した ODA 案件につなげたり、ビジネススペースでの活動へと導くことを通じて途上国の発展を図ろうとしています。

また、従来から行っている協力でも、帰国された専門家や青年海外協力隊をはじめとするボランティアの方々が、途上国での経験を活かしてその後どれだけ地域の発展に貢献しているか、あるいは、技術研修員を受け入れている団体や地域、国際交流事業を行っている団体や地域がどれだけ元気になっているか、ということに注目してみれば、国際協力が日本を元気にするという意味をわかっているのではないかと思います。

開発途上国を元気にして日本も元気になるような国際協力を行うのが JICA の大方針です。九州 7 県を所管する JICA 九州は、途上国を元気にすることで九州が元気になり、九州が元気になることで日本も元気になる、そういった事業を行う使命を帯びていることになります。

私は昨年 3 月 JICA タンザニア事務所より JICA 九州へ異動してまいりました。今後、皆様のご理解とご協力をいただきながら、九州を元気にする国際協力を進めてまいりたいと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

私は昨年 3 月 JICA タンザニア事務所より JICA 九州へ異動してまいりました。今後、皆様のご理解とご協力をいただきながら、九州を元気にする国際協力を進めてまいりたいと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。



この一年を振り返って

会長 赤木洋勝

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、それぞれ新たな気持ちで国際協力活動に取り組まれておられることと拝察いたします。

近年、地球のあちこちで極端な高温や大雨、低温や大雪など異常気象が頻発しています。わが国でも昨年の夏には、日本列島が記録的な猛暑と度重なる集中豪雨に見舞われ、高知県四万十市で最高気温41.0℃を記録、また山口と島根、秋田と岩手の各県では、これまで経験したことのない大豪雨が襲いました。一方、世界を見渡しても、昨秋の11月8日、瞬間風速105メートルの猛烈な台風がフィリピン中部を直撃、1,600万人が被災するという大災害が起きました。これらの自然災害は人間活動に起因した環境破壊、地球温暖化と無縁ではなく、地球環境保全に向けた地道な実践活動がこれまで以上に求められているように思えてなりません。世界の人々がこの地球上で安心して暮らせる時代をつくるためにも、JICAの果たす役割はますます多大なものになっています。

さて、「シニア海外ボランティア OB 会」、「青年海外協力協会」の各団体が連携する「くまもと国際協力連合会」(藤本吉幸会長)が誕生して早や1年余り経ちました。昨年は、藤本先生のリーダーシップの下、

当連絡会もその一員として海外協力隊壮行会、帰国報告会、国際交流祭典、連合会総会・講演会等の各種事業・行事へも積極的に参加、幅広い交流活動を行ってきました(行事記録)。本連合会の牽引役をお引受けいただいた藤本会長はじめ、役員の皆様のご尽力に改めて深く感謝申し上げます。

ここで大変嬉しいニュースを一つ。当会会員の小野友道先生(熊本保健科学大学学長)が第63回熊日賞を受賞されました(3頁に新聞記事を掲載)。先生ご専門の皮膚科学分野におけるご活躍はもとより、大学運営、社会・文化活動にも精力的に取り組まれる傍ら、当会活動にも積極的に協力される先生のご受賞は、私ども関係者にとっても大変嬉しいニュースでした。その受賞祝賀会が「くまもと国際協力連合会」主催で昨年7月27日、JICA九州、熊本県、熊本大学等の関係機関からの来賓ご臨席の下、熊本交通センターホテルにて開催され、先生には「いれずみの文化誌」と題して素晴らしいご講演をいただきました。

昨年10月には、地球規模の水銀汚染とそれに伴う健康・環境被害を防止するための「水銀に関する水俣条約」外交会議が本県で開催され、首尾よく本条約が採択されたことはご承知のとおりです。私自身現在も、この水銀の汚染問題に係るJICA技術協力事業に携っておりまして、海外に出かけて留守の期間が長いために当会の運営等、皆様に多大なご迷惑をお掛けしています。この場を借りて深くお詫び申し上げます。私自身がこんな状況ですので、会員の皆様にはこれまで以上に当会へのご理解とご協力をお願いいたします。

平成25年度 熊本県JICA派遣専門家 連絡会活動記録

年	月	日	行事	場所
25	1	12	第1回連合会役員会	パレア
		19	専門家連絡会総会	国際交流会館
	3	23	第2回連合会役員会	パレア
	4	4	JICA九州新所長懇談会	熊本市内
		20	アースデー	熊本新市街
	5	8	国際協力連合会総会	国際交流会館
			熊本県国際協会総会	交通センターホテル
	7	27	小野友道会員熊日賞受賞祝賀会	〃
	9	13	第3回連合会役員会	パレア
	11	24	国際交流祭典	パレア
			JICAボランティア帰国報告会	国際交流会館
	12	20	JV・SV壮行、歓迎会	市民会館
			田村和子氏を語る会(ボリビア展)	国際交流会館

平成24年度総会及び講演会の開催

平成25年1月19日、熊本市国際交流会館にて来賓、会員23名の参加を得て24年度の総会及び講演会を開催しました。本総会では来賓ご挨拶、会務報告に続いて、「当連絡会申し合わせ事項」の一部改正を行ないました。



食・環境の安全性とJICAプロジェクト

有菌幸司（熊本県立大学）

私は、JICA専門家としてフィリピン労働安全センターでの活動を皮切りに、インドネシア環境管理センター、チリ国環境センター、マレーシアSIRIMセンター等いくつかのプロジェクトに参加してきた。以下その中で思い出深く、食・環境の安全性を考えるきっかけとなった活動を振り返ってみた。

最初のJICA専門家としての活動は長崎大学薬学部在任時、フィリピン労働安全センターであった。上司の有吉教授のご快諾もあり、労働省(当時)関連でKITA・産業医科大学児玉先生、大久保先生のプロジェクトで小笹リーダーのもと水銀鉱山の作業員の健康管理に関して、血中水銀や鉛の測定の指導をお手伝いさせて頂いた。併せて、稲作地帯の農薬使用指導、健康調査にも同行させて頂き、現地指導の難しさを実感し、途上国の食材や食品の安全性について考えるようにもなった。



インドネシア環境管理センター(EMC)のプロジェクトは、環境庁(当時)関連であり、NIMD赤木先生や北九州市の篠原先生(現熊本県立大学客員教授)のお口添えもあり、環境省からの山村リーダーや大林リーダーのもと、数回にわたり環境汚染モニタリング調査を視野にいたした各種機器分析やバイオアッセイの技術の指導を行った。途中でインドネシア政変もあったが、このプロジェクトでの経験が、私の途上国での食・環境の安全性に関する活動の基となっている。

マレーシアSIRIMセンター、チリ国環境センターのプロジェクト参加は、それぞれ経済産業省および環

境省の依頼であり、化学物質管理に関する技術指導や毒性化学物質の毒性試験方法に関する講演と指導を行った。これらの活動では改めて食・環境の安全性の点から養殖場や農場での農薬などの管理、環境水管理についても考える機会となった。

最近では、インドネシアにおけるJICA技術協力事業草の根の活動を主に関与している。これは、平成3年から平成5年に環境庁からインドネシア環境管理庁に赴任され、EMC設立等にも尽力された現長崎大学環境科学部早瀬教授をプロジェクトリーダーに行っているものである。当初、平成22年から平成24年にインドネシア大学、インドネシアナショナル大学との協力で、持続可能な発展のための教育(ESD)をインドネシアの小学校およびコミュニティで実践す



るプロジェクトを実施した。本年度(平成25年)から新たに、平成28年度までの予定で南ジャカルタにおける持続可能な地域づくり活動のための地域ネットワーク構築事業を開始し、河川の衛生管理や農作物の安全性に関して活動を始めたところである。

最初のJICA専門家としてお声掛けいただいたころは、大学の研究室で座学(論文等)や動物実験結果から情報を得ての講義手法に行き詰まりを感じていましたので、JICAでの現場活動から得られた多くの経験は、食・環境の安全性を基盤とした衛生化学(生命を衛る化学)を実学として実践する私の大学人としての生活を支えてくれています。

エジプトで水利組合を育成

エジプト国 水管理改善プロジェクト・フェーズ 2
元チーフアドバイザー（現九州農政局）進藤 惣治

エジプトでは、就業人口の約 25%が農業に従事しており、果実や野菜等の農産品の輸出は、石油・石油製品の輸出総額に次いで大きな割合を占めている（輸出総額の約 12%）ことから、農業分野の重要性は高いと言える。

また、エジプトは、降水量が少なく、必要水量の約 95%をナイル川に依存している上、スーダンとの二国間の国際水利協定により年間取水量が制限され、新たな水資源の開発に制約がある。さらに、急激な人口増加（年率 2%）による水消費の増大と、農業生産と雇用の拡大を目指した農地開発により、水資源の需給が逼迫している。

このようなことから、エジプトでは毎年のように水不足が発生している。その主たる原因は農業用水にある。水利用の8割以上を占めながら、秩序なく取水され、十分な管理が行われずに、非効率な水利用が行われているためである。他の途上国同様、エジプトでも水路の管理は主として政府が行っている。しかし、財政悪化に伴い、施設の維持管理が十分に行われず、農家側にも節水に対する責任意識はほとんどない。このため、エジプト政府は、農家による水利組合を設立し、維持管理費徴収と施設管理を移管することで、水利用の効率化を図るとともに、持続的な灌漑施設の管理体制を確立しようとしている。

水管理改善プロジェクト・フェーズ 2（以下、「プロジェクト」）は、2008年6月に活動を開始。水利組合は政府によって設立は進められているものの、ほとんど活動していないのが実態であることから、水利組合の活動を活性化させ、将来的な施設管理を政府から移管させる下地をつくることを目的に2012年3月まで実施した。

水利組合の基本は、組合活動により組合員が恩恵を受けること、利益となること。そこで、プロジェクトは参加型で問題を分析し、解決策を討議。また、研修を行い、知識を深めるとともに、実際の問題解決を行う手法を採用。こうした一連の活動を通じて、組合活動が組合員に利益を与えることを実際に示すこ

とを考えた。

パイロットサイトの一つ、ラシュ・エル・ガルビ地区でも、水路末端部での水不足が問題だった。これまで、農家は、水を十分に供給していないとして政府を批判していたが、プロジェクトで実際に流量を測定したところ、水は規定どおり供給されていることが判明。水不足の原因は、維持管理が行われていないため、水路表面が壊れ、草木が茂るまでになった水路にあると判断した。そこで、関係者で対策を協議し、プロジェクト側がセメントや砂などの材料費を負担（将来は政府が負担）、政府技術者が設計や施工の指導を実施、作業員のコストは水利組合が負担する形で作業を実施。補修工事はわずか2週間の断水期間に見事完了した。水は無事水路の末端まで到達。水路全線の補修は終わっていないが、補修ノウハウを得た水利組合は、残りの補修を独自で行うことを確約した。

プロジェクト開始前は、全く活動を行っていなかった水利組合だが、この工事をきっかけに組合員の信頼を得、組合員から資金を集めて、組合事務所を建設するに至った。組合員は、水利組合の活動が、自らの利益になることを理解し、地域住民とともに水路沿いのゴミを集め、環境の啓発を行う「環境キャンペーン」を実施するなど、今では、地域のリーダー的存在になっている。

《注：本報告は、外務省 ODA メールマガジン
（2012年7月号）を再編集したものです》



写真 水利組合による水路の補修作業

田村和子さんを悼む

青年海外協力隊 OG として、国際協力関連行事では、いつも笑顔で精力的に活動しておられた田村さんが、11月2日逝去されました（熊日記事参照）。かつての任国ボリビアをはじめ途上国支援に尽力し、爽やかに潔く駆け抜けた同志の生涯に深甚の敬意を表し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

（くまもと国際協力連合会会長 藤本 吉幸）



（第3種郵便物認可）



田村和子さんと親交のあった人々が集まった「南米ボリビア国の紹介」展＝23日、熊本市中央区の市国際交流会館

女性は南米音楽の演奏グループの一員で、青年海外協力隊員としてボリビアで活動していた田村和子さん。ボリビア展は彼女の夢だった。葬儀も弔電も供花も拒んだ田村

記者ノート

女性は南米音楽の演奏グループの一員で、青年海外協力隊員としてボリビアで活動していた田村和子さん。ボリビア展は彼女の夢だった。葬儀も弔電も供花も拒んだ田村和子さんと親交のあった人々が集まった「南米ボリビア国の紹介」展＝23日、熊本市中央区の市国際交流会館

心に足跡残した女性の旅立ち

託したものであった。なぜ、こんなメッセージを残したのだろうか。どんな人だったのか、どんな人生だったのか。その人生を追う取材を始めた。

「明るくて、いつも笑顔」「困っている人を見ると放っておけない」「面倒見がいい」「筆まめ」「古い物を大切に使う」「節約を心掛け、エレベーターも極力使わない」。友人たちの話から、一人の女性の姿が浮かび上がってきた。

「かっぽう着を着た昭和のお母さん」と評する人もいた。自分のことは後回しで、人のために奔走。海外協力隊への参加前は、青年団体活動にも長くかかわった。11月末、その仲間の「しのぶ会」もあった。県外からも多くの友人らが集まり、みんなの心に残した足跡の深さを思った。

「私たちが、これからどんな人生を生きるか。それによって彼女の遺志は引き継がれていくと思う」。友人の一人はそう語った。かわった人たちの心に深い印象を刻み、旅立った田村さん。私にも忘れられない人になった。（楠本佳奈子）

新会員



瀧下 良信（たきした よしのぶ）
オーストラリア・クィーンズランド大学政治科学・国際学科博士課程修了
青年海外協力隊員としてケア建設省へ派遣、ジンバブエにて難民救援活動、JICA 中国事務所、国連ボランティア難民担当官としてマレーシアに派遣、国連難民高等弁務官事務所ワールドワイドオフィサーとしてパングラティに派遣、クィーンズランド大学非常勤講師、青年海外協力隊プログラムオフィサー、(株)NSOC に所属してヨロネ諸島・パリスの JICA に勤務、現在に至る



森貞 和仁（もりさだ かずひと）現在：森林総合研究所九州支所所長
1979年 農林水産技官採用
インドネシア教育文化省派遣、森林総合研究所企画調整部海外研究協力室長、森林環境部立地評価研究室長、独立行政法人森林総合研究所温暖化対応推進拠点チーム長、北海道支所産学官連携推進調整監を経て、2013年4月から現職
農学博士（平成22年東京大学）、専門；森林土壌

○この度、瀧下良信会員、森貞和仁会員が新たに加わりました。
○所属や住所変更、入会・退会会員などの連絡は下記事務局までお知らせください。
事務局：〒867-0034 水俣市袋1974-7 赤木洋勝 電話 0966-63-1689（自宅）
0966-63-0810 FAX 兼用（国際水銀ラボ） E-mail h610akagi@ybb.ne.jp